



Title	ヘンリー・コスター『ブラジル旅行記』（1816年）について(1)：人と作品
Author(s)	東, 明彦
Citation	ブラジル研究. 2012, 8, p. 51-60
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/106533
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ヘンリー・コスター『ブラジル旅行記』

(1816 年) について(1)

一人と作品一

東 明彦

はじめに

1. 南米のポルトガル領において有色自由人に関する法律に一般に広く見られる公正さは、奴隷状態にある人々にもある程度拡大して適用されてきた。それでブラジルの奴隷の境遇は、他の国々の支配下で喜びのない生活を送るみじめな人々の境遇ほどは、厳しいものでも、耐えがたいものでもない。ブラジルの奴隷は、奴隷主が信仰する宗教の教えを受けているし、またかれらは自分自身の努力で奴隷身分から解放されるという望みを持っている。(中略)

ブラジルの奴隷はイギリス領植民地のかれらの同胞に比べて恵まれた立場にある。カトリックの教義が遵守するように

命じる数多くの祝祭日のおかげで、奴隷には多くの休息日、あるいは自分自身の利益のため働く時間が与えられている。つまりこのような三五日の祝祭日、それに日曜日には、奴隷はその時間の大部分を自分が思うように使うことができるのである。

2. ブラジルの農業は、ごく最近まで長い間いかなる進歩も見られなかったし、いまでもその革新はゆるやかで、しかもそれは数多くの困難に直面している。(中略) 内陸部の砂糖農園主の大部分、それに海岸部の砂糖農園主のなかでももっぱら自分の農園で生活する者の大部分は、いま述べたごとく〔ひどく無知〕であったし、いまでもその多くはそのような状態に変わりがないのである。かれらは年々、父祖が行ってきたやり方を踏襲しているのがあって、何かを改善したいという願望もなく、また実際どのような改善をしようにも、それに必要な知識をもちあわせていないのである。¹

上記の引用は、ヘンリー・コスター²『ブラジル旅行記』(1816 年)からの引用である。19 世紀初頭、結核の転地療法を目的にブラジル北東部ペルナンブーコに滞在した、ポルトガル生まれのイギリス人コスターは、自分が見聞したブラジルの様子を克明に記録した。コスターの『ブラジル旅行記』は、その刊行後すぐに高い評価を得たが、中でも第 19 章「奴隷制」は、砂糖農園の経営にも携わったコスターの経験に裏打ちされており、当時のブラジル社会を知る優れた著述となっている。

本稿「ヘンリー・コスター『ブラジル旅行記』(1816 年)について(1)一人と作品一」では、コスターが滞在した時期のブラジルを振り返るとともに、『ブラジル旅行記』の執筆の経緯を取り上げる。そして、次稿「ヘンリー・コスター『ブラジル旅行記』(1816 年)について(2)一作品に描かれたブラジルの奴隷制社会一」では、第 19 章「奴隷制」を中心に、コスターがブラジルの奴隷制社会をどのように捉えていたのかについて、その特徴を検討することにする。

第1章 19世紀初頭のブラジル

コスターがブラジルに滞在した19世紀初頭は、ブラジルの変動期であった。フランス革命からナポレオン戦争にいたるヨーロッパの情勢が、ブラジルの歴史動向に決定的な影響を及ぼしたからである。

コスターがブラジル北東部レンフェに到着したのは、1809年12月のことであるが、その2年前、すなわち1807年、フランスのナポレオン1世は大陸封鎖令（1806年）に従わないポルトガルの軍事的占領を試みた。これに対し、ポルトガル王室は、フランス軍の侵攻に抵抗することなくポルトガル本国を離れ、協調関係にあったイギリス艦隊の護衛のもと、貴族、官吏、軍人を引き連れて、植民地ブラジルに避難し、1808年、北東部バイアに到着した。

バイア到着直後の1808年1月28日、王室は、開港と友好国（イギリス）との自由貿易を許可した。その後、ポルトガル王室は、1810年のイギリスとの同盟友好条約・通商航海条約によって、イギリスに対して従価15%という優遇的な関税を認めたが、これによって、ブラジルに対するポルトガルの経済的な植民地支配は実質的に終焉を迎えることになった（当時、本国ポルトガルからの製品には、従価16%の関税が課された）。そして、この時期、ブラジルには、イギリス製品が溢れ、初期段階にあったブラジル工業に致命的な打撃を与えた。コスターがブラジルに到着したのは、まさにこの時期であった。

政治的にも、1808年以降の数十年は、ブラジルが大きな変動を経験した時期であった。1815年には、ポルトガル・ブラジル・アルガルヴェ連合王国が成立し、行政機構（陸軍・外務省、海軍省、大蔵・内務省の三省）の整備、ブラジル銀行、通商評議会、最高裁判所等の誕生、さらには、行政区分の変革（カピタニアの廃止と県の設定）など、ブラジルでは、大きな変化が起こった。

社会的には、この時期、ブラジルでは、いわゆる「文明開化」の政策が講じられ、実質上ポルトガル王国の首都となったリオデジャネイロを中心に、博物館や図書館、劇場、天文台、植物園、さらに医学校、美術学校、士官学

校などが創設された。王立印刷所の設立（1808 年）にともない、ブラジル初の新聞「ガゼタ・ド・リオ・デ・ジャネイロ」など印刷物が刊行され始めたのもこの時期であった。

コスターが使用するブラジルという言葉は、ペルナンブーコを中心とする北東部に限られていたが、その北東部においてさえ、ポルトガル王室のブラジル移転にともなう社会変動の影響は、明白であった。一例だけ挙げると、北東部ペルナンブーコのレシフェの町にも、ガラス窓や鉄製のバルコニーが設置された明るい家屋が登場し、服装の面でも、紳士や淑女は、当時のヨーロッパの流行を取り入れるようになった。さらには、ブラジルにはなかった婦人が午後や夕方散歩する習慣も、レシフェの町で見られるようになったのである。³

また、コスターが滞在した北東部ペルナンブーコでは、1817 年、自由主義革命が勃発する。これは、リオデジャネイロに移転したポルトガル王室の中央集権化政策に反発した地方反乱の一つであるが、1850 年代にいたるまでこのような反中央集権的な自由主義運動は、各地で継続した。コスターは、このようなブラジルの変動期を目の当たりにした。

第2章 コスターの人と作品⁴

〔生涯〕

ヘンリー・コスターは、イギリス商人ジョン・セオドア・コスターの息子として、ポルトガルのリスボンで生まれた。幼少期をポルトガルで過ごしたことから、1809 年以降ブラジルに滞在した時にも、流暢なポルトガル語を話し、彼がイギリス人であることを疑う者がいたほどで、現地では、エンリケ・デ・コスタというポルトガル語名で知られていた。

コスターがブラジルを訪れたのは、好奇心からの物見遊山のためでも、学術調査を目的とする使節団の一員としてでもなかった。結核を患っていたコスターは、家族や知人の薦めで、転地療養のために温暖なブラジルを訪れたのである。そもそも、イギリス人にとって、「南国」であった、ポルトガルや

スペインが上述のナポレオン戦争の影響で、とても転地療養の候補地とならなかったことが、ブラジルを選んだ理由の一つであった。

コスターは、1809年11月2日に、ルーシー号でイギリスのリヴァプールを出航し、12月7日には、ブラジル北東部のレシフェに到着した。ペルナンブーコを選んだのも、知人の薦めであった。

ブラジルに到着し、コスターの健康状態は良好とまではいえないものの、改善の兆しはあった。そのため、コスターは、ブラジル北東部の内陸部への旅行を企てた。1810年10月19日、コスターは、レシフェ北方のゴイアナ(Goiana)へ向けて出発し、ゴイアナ滞在後には、パライバへ、さらには、数百キロの道のりを陸路、馬に乗って、セアラのフォルタレザに向かった。彼は、その長い旅路の自然や人々の生活など旅行で見聞したすべてを記録していった。アスー(Assu, Açú)を經由して、12月16日には、フォルタレザに到着、翌年の1月8日まで滞在した後、再び、ゴイアナへ戻り、2月16日には、レシフェでイギリス人の友人と再会したが、友人は、コスターに再び会えるとは思っていなかったと話したという。

コスターの精力的な旅はさらに続き、1811年2月22日には所用のため、海路で、北部のマリヤニャンへ向かった。一週間でマリヤニャンに到着後、4月8日まで当地に滞在、今度は、ブルータス号でイギリスに戻り、5月20日にはファルマスに到着している。ただ、結局イギリスには、長期には滞在せず、寒さが始まる10月初旬(10月4日)には、グレーブゼンドでポルトガル船セラ・ペケーノ号に乗船した。同船は、イングランド南部のライト島のカウズを11月20日に出港、12月27日には、レシフェに到着した。

その後、1812年にも、ボン・ジャルディン(Bom Jardim)など北東部内陸部への旅行を行っている。このような旅の見聞録がコスターの『旅行記』の前半部分の記述の基礎をなしている。

1812年4月、コスターは、レシフェから4レグア、海から1レグアの距離にあるジャグアリベ(Jaguaribe)に、奴隷や牛、設備類とともに、砂糖農園を借り、農園の経営に携わることとなった。その後、1813年には、土地を巡

る争いから、北方のイタマラカー島のアンパロ(Amparo)砂糖農園に移り住むことになるが、これらの農園での生活経験によって、彼の『旅行記』は他の外国人旅行者の旅行記とは違う、異色なものとなっている。

コスターは、ブラジルでの生活に嫌気が差したわけではなかったが、1815年初頭、イギリスに帰還する決意を固めた。帰国後、おそらくは詩人・作家のロバート・サウジー（1774-1843）の薦めで、1815年から1816年にかけて、『ブラジル旅行記』の執筆を行った。サウジーは、すでに1810年、著書『ブラジル史』を公刊し、名声を勝ち得ていた人物であった。サウジーは、自著を出版したロンドンの出版社ロングマン・ハースト・リー・オーム・アンド・ブラウン（Longman, Hurst, Rees, Orme, And Brown）をコスターに紹介した。また、ポルトガルへの3度の旅行で収集し、イングランド北西部カンバーランドの邸宅に所蔵されていた蔵書1万4000冊の利用の便宜も図り、コスターはここで『ブラジル旅行記』を執筆した。サウジーとコスターの関係が生まれたのは、おそらく、リスボンのイギリス商館付属小協会の牧師であった、サウジーのおじハーバート・ヒル師を介して、サウジーがリスボン在住のコスターの父母と知り合いであったからだと思われる。

コスターは、イギリス帰国当初はブラジルに戻るつもりはなかったが、1816年に『ブラジル旅行記』を出版すると、10月か11月頃に、自分の健康にとって良い気候を求めて、ペルナンブーコに戻った。その後の彼の消息は、あまり定かではないが、1819年12月には、1821年に『ブラジル史』を刊行するジェームズ・ヘンダーソンとレシフェで面会したことが、ヘンダーソンの記述から分かっている。その記述によると、コスターは、面会の数ヶ月後にレシフェで死去したものと考えられる。⁵コスターの遺体は、ペルナンブーコのサント・アマロにあるイギリス人墓地（1814年創設）に埋葬された。

〔作品〕⁶

『ブラジル旅行記』は、上述のように、1816年にロンドンで出版された。著作は、21章で構成されているが、おおむね前半の第13章までが年代順にブ

ラジルでの旅行や出来事を記述したもので、後半の第 14 章から第 21 章までが、事項による章立てとなっている。後半では、動植物や農業分野（砂糖プランテーション、綿）に関する事項のほか、第 18 章「自由人」、第 19 章「奴隷制」、第 20 章「人道に反する奴隷貿易」などの項目が並んでいる。

ルイス・カマラ・カスクードは、以下のような、19 世紀前半に刊行された『ブラジル旅行』の主要な版を挙げている。⁷

1.^o - *Travels in Brazil*, Longman, Hurst, Rees, Orme, And Brown, London, 1816.
(501 頁)

2.^o - *Travels in Brazil*, Longman, Hurst, Rees, Orme, And Brown, London, 1817.
(Vol.I 406 頁、Vol.II 380 頁)⁸

(なお、第 2 版では、ページ数が大幅に増加しているが、これは 1 頁あたりの文字数の変更によるもので、内容に変化はなく、増訂がなされたわけではない。)

3.^o - *Travels in Brazil*, “*Travels in Brazil in the years from 1809 to 1815*”, Philadelphia, 1817. (Vol.I 340 頁、Vol.II 323 頁)

4.^o - *Reisen in Brasilien*, “*Neue Bibliothek der Wichtigsten Reisebeschreibungen zur Erweiterung der Erd und Völkerkunde*”, (dir. F. Y. Bertuch) Weimar, 1817. (624 頁)

5.^o - *Voyages dans la Partie Septentrional du Brésil*, (depuis 1809 jusqu’en 1815, comprennent les provinces de Pernambuco (Fernambouc), Seara, Paraiba, Maragnan, etc.) (trans. M. A. Jay), (Chez Delaunay Librairie, Palais Royal, Galerie de Bois n.^o243) Paris, 1818. (Vol.I 375 頁、Vol.II 512 頁)

つまり、『ブラジル旅行記』の刊行後 2 年以内に、ドイツ語版、フランス語版を含め、合計 5 種の版が発行されているのである。(1816 年にロンドンで初版が 1 巻本として出版されたのち、早くも翌 1817 年には、ロンドンで初版と同じ出版社から、第 2 版が 2 巻本として刊行された。さらにアメリカ合衆国のフィラデルフィアでも、同じ年に米国版が出版された。また同じく 1817 年にワイマールでドイツ語版が出版され、翌 1818 年には、パリでフランス語版が刊行された。)

このような矢継ぎ早な再版や翻訳本の刊行は、それ自体、『ブラジル旅行記』

が好評を博したことの証左であったし、このほか、書評においても、評価は高かった。上述のサウジーが『クォーターリー・レビュー』誌上で『ブラジル旅行記』を絶賛したほか、随筆家ジョン・フォスター（1770-1843）も『エクレティック・レビュー』誌に好意的な書評を寄せた。⁹

英語版のほか、ドイツ語版やフランス語版が刊行される一方で、ポルトガル語版の刊行は遅れた。最初のポルトガル語版は、アントニオ・C・デ・A・ピメンテルがM・A・ジェイ訳のフランス語版（1846年発行。1818年版の再版）をもとに翻訳したもので、ペルナンブーコ考古学研究所の紀要の第51号（1898年）から第147-150号（1931年、配布は1933年）までに分けて掲載された。この訳は、結局、1冊にまとめられることはなかった。もとにしたフランス語版自体があまり正確でなかったため、ポルトガル語版にもそのような欠点を引き継がれたと言われている。

ポルトガル語訳の決定版が発行されたのは、1942年になってからである。著名なブラジル文化研究者であるルイス・ダ・カマラ・カスクードの翻訳および校注によるこの訳（Henry Koster, (Tradução e Notas de Luiz da Camara Cascudo), Viagens ao Nordeste do Brasil "Travels in Brazil", "Brasiliana" Biblioteca Pedagógica Brasileira, Serie 5.a Vol. 221, São Paulo, 1942）は、その後（1978年、2002年、2003年）、いくつかの出版社から再版されている。

コスターの『ブラジル旅行記』が好評を博し、高い評価を得た理由は、いくつかあった。1808年、上述のようにポルトガル王室はブラジルに移転し、開港政策に踏み切った。それを契機にブラジルの諸港には、外国船が殺到したが¹⁰、ヨーロッパの人々にとって、それは、いわば「ブラジルの再発見」であった。また、コスターの描いたブラジルは、ペルナンブーコを始めとする北東部地方であったが、『ブラジル旅行記』に登場する内陸部地方の人々の生活や自然は、ヨーロッパの人々にとっては、初めて紹介される未知の世界であった。人々はブラジルの新たな情報に大きな関心を抱いた。ただし、『ブラジル旅行記』の最大の魅力は、記述の具体性や正確さにあったといえる。1869年、地理学者リチャード・バートン(1821-1890)が『ブラジルの高原地方』の

序章で、ブラジルの人々を扱った著作を回顧したとき、彼は、コスターを the accurate Koster (正確なコスター) と呼んだ。¹¹ またフランス人博物学者サンティレール (1779-1853) が、「コスターは、彼が訪れた地方を正しく描いた。」と述べたのも、そのような意味であった。¹²

次稿では、上述のヘンダーソンの言葉を借りると、「ブラジルの北部地方のこの旅行記の出版によって文壇で名声を博した紳士」¹³ となったコスターが『ブラジル旅行記』で描いたブラジル北東部に関する記述を、「奴隷制」をキーワードとして、考察することにする。

(以下次号)

注

¹ Henry Koster, *Travels in Brazil*, (London, 1816), pp. 402-403, p. 336; Henry Koster, *Travels in Brazil*, (London, 2nd ed., 1817), Vol. II, pp. 227-229, pp. 123-124; (拙訳)、歴史研究会編『世界史史料 南北アメリカ 先住民の世界から一九世紀まで』(岩波書店、2008 年)、p. 285 所収。

コスターは、黒人奴隷制・大土地所有制にもとづく旧態依然としたブラジル社会に批判的ではあったが、ブラジルの習慣や風習を嘲笑の対象としたわけではなかった。彼は、自分自身の体験をもとに、奴隷の生活を含めて、北東部ペルナンブーコの都市や農村の人々の生活を具体的に描いた。Maria Lúcia de Souza Rangel Ricci, "Koster, Henry" in Maria Beatriz Nizza da Silva (coordenação de) *Dicionário da História da Colonização Portuguesa no Brasil*, Lisboa, 1994, pp. 469-472.

² コスターの生没年は不詳であるが、ブラジルやポルトガルの国立図書館、あるいはアメリカ議会図書館のデータベースでは、生年 1793 年頃、没年 1820 年となっている。大英図書館のカードには、生没年の記載がない。1793 年生まれだとすると、1809 年にブラジルに到着したのは、15～16 歳のことになり、『ブラジル旅行記』が刊行されたのは、22 歳～23 歳であり、26～27 歳で没している。ただし、レオナルド・ダントス・シルヴェアのように、コスターがブラジルに到着したのは、25 歳であったとする説もある。

³ Koster, *Travels in Brazil* (1816), p. 188.

⁴ Henry Koster, (Tradução e Notas de Luiz da Camara Cascudo), *Viagens ao Nordeste do Brasil "Travels in Brazil"*, "Brasiliense" Biblioteca Pedagógica Brasileira, Série 5.ª Vol. 221, São Paulo, 1942, pp. 9-28; Ricci, "Koster, Henry", pp. 469-472 などによる。

⁵ "...but his very delicate appearance indicated a rapid decline and I regret to say that he did not

long survive." James Henderson, *A History of the Brazil*, London, 1821, p.393, Koster (1942) p. 28 より引用。

⁶ コスターの著作には、第2版で2巻786ページにおよぶ大著 *Travels in Brazil* のほか、ブラジルの奴隷制を論じた *On the amelioration of slavery* (London: The Pamphleteer. vol. VIII., no. XVI, 1816, pp. 306-336.) という小著がある。この小著の扉頁の著者名 Henry Koster のすぐ下には、Author of "Travels in Brazil" と記されている。

⁷ Koster, *Viagens ao Nordeste...* (1942), pp. 16-17.

⁸ 1816年版も、1817年版も、British Library Historical Print Collections (History of Travel Collection)に収められており、リプリント版が入手可能である。

⁹ Koster, *Viagens ao Nordeste...* (1942), p. 19.

¹⁰ 開港当初、ブラジルでは、熱狂的な貿易ブームが沸き起こった。「市場は、おびただしい商品で溢れていた。摂政王子の到着直後、リオデジャネイロには予期せぬ大量のイギリス製品が流入したので、それらを保管する家屋の賃料は猛烈な勢いで上がった。グアナバラ湾は船でいっぱいとなり、税関は商品の多さにじき音を上げた。多量の金具や釘、塩漬けの魚、山ほどのチーズ、帽子、ガラスケース、陶器、綱、樽詰ビール、インク、ゴム、樹脂、タールなどは、日光や雨だけでなく、やりたい放題の略奪にもさらされている (Mawe)」状況であった。シッコ・アレンカール、ルシア・カルピ、マルクス・ヴェニシオ・リベイロ著 (東明彦、アンジェロ・イシ、鈴木茂訳)、『ブラジルの歴史』、明石書店、初版2003年、第3版2012年、pp. 170-171.

¹¹ Richard F. Burton, *The Highlands of the Brazil*, London, 1869, Vol. I p.3.

¹² Koster, *Viagens ao Nordeste...* (1942), p. 20.

¹³ Koster, *Viagens ao Nordeste...* (1942), p. 20.

参考文献

歴史研究会編『世界史史料 南北アメリカ 先住民の世界から一九世紀まで』
(岩波書店、2008年)

Koster, Henry, *Travels in Brazil*, (London, 1816), British Library Historical Print Collections (History of Travel Collection) 9781241502300

Koster, Henry, *Travels in Brazil*, (London, 1817), British Library Historical Print Collections (History of Travel Collection) 9781241439262

Koster, Henry, (Tradução e Notas de Luiz da Camara Cascudo), *Viagens ao Nordeste do Brasil "Travels in Brazil"*, "Brasiliana" Biblioteca Pedagógica Brasileira, Série 5.^a Vol. 221, São Paulo.

Ricci, Maria Lúcia de Suoza Rangel, Koster, Henry, in Silva, Maria Beatriz Nizza da (coordenação de) *Dicionário da História da Colonização Portuguesa no Brasil*, Lisboa, 1994.

Schwartz, Stuart R., *Sugar Plantations in the Formation of Brazilian Society, Bahia, 1550-1835*, Cambridge, 1985.